

森と自然の育ちと学び自治体ネットワーク設立記念シンポジウム

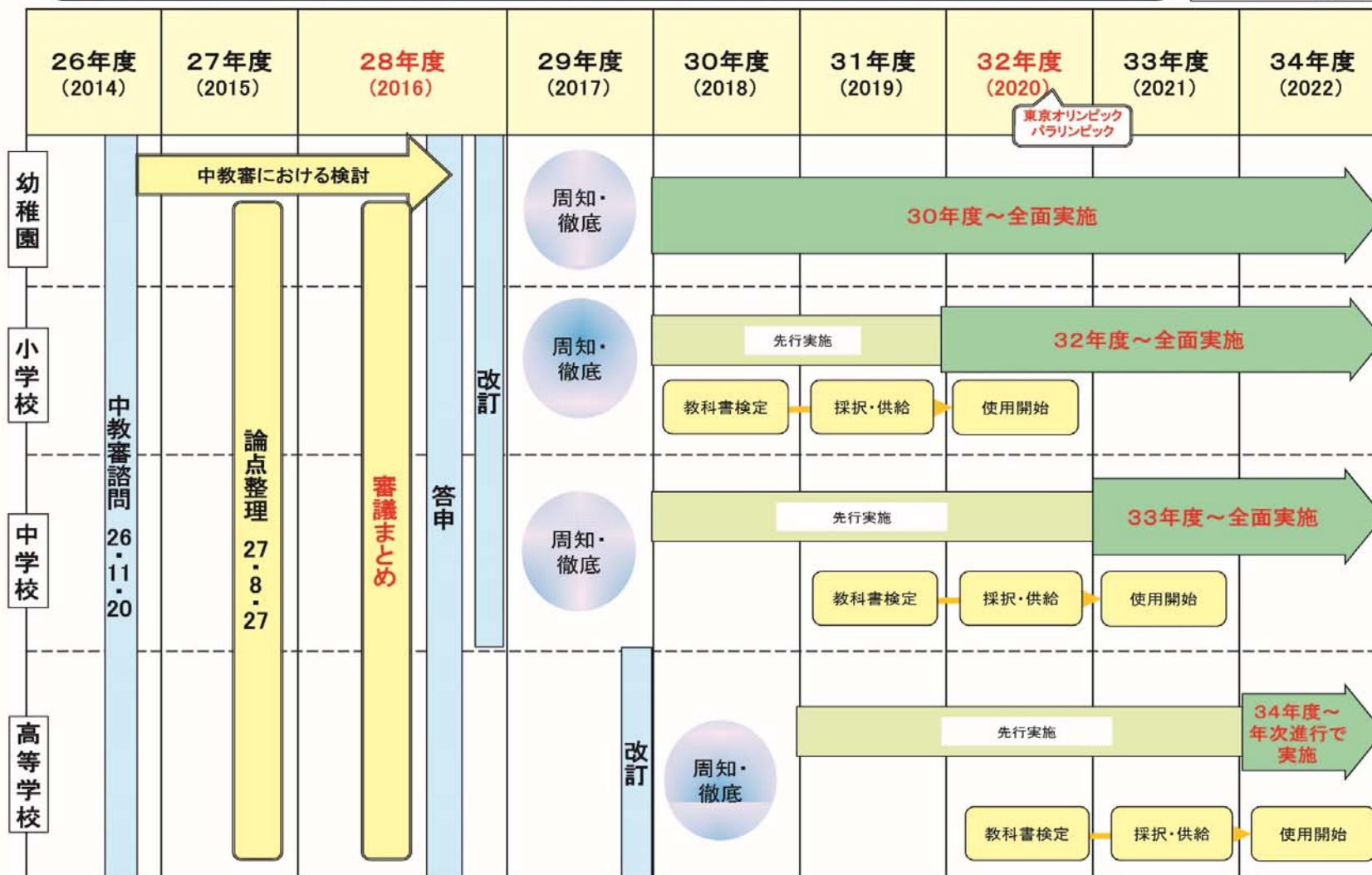
新たな幼稚園教育要領・保育所保育指針等から 見る幼児期の自然体験活動の促進について



独立行政法人 国立青少年教育振興機構
鈴木みゆき

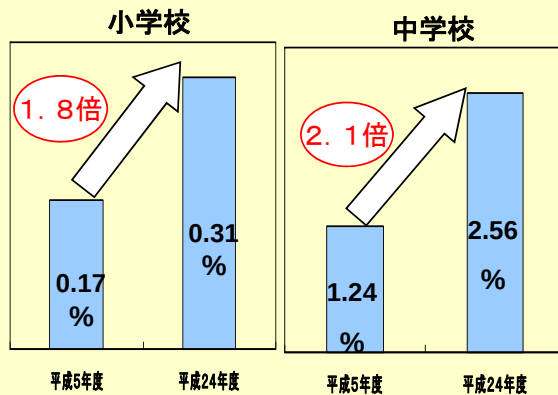
今後の学習指導要領改訂スケジュール（現時点の進捗を元にしたイメージ）

平成28年8月26日
中央教育審議会
教育課程部会
資料3



学校現場が抱える課題の状況

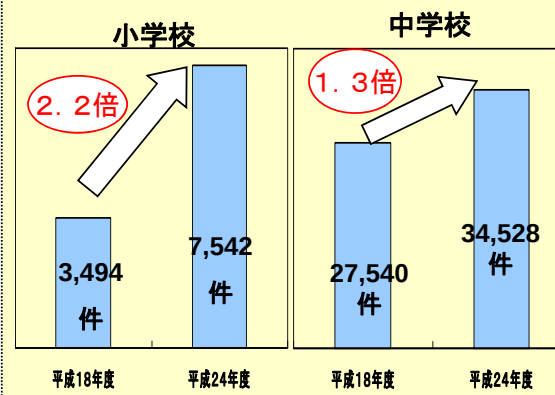
不登校児童生徒の割合



(注) 国・公・私立学校のデータ

(出典) 文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」

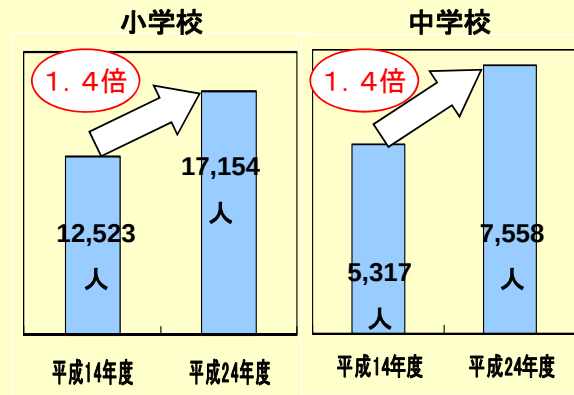
学校内での暴力行為の件数



(注) 国・公・私立学校のデータ

(出典) 文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」

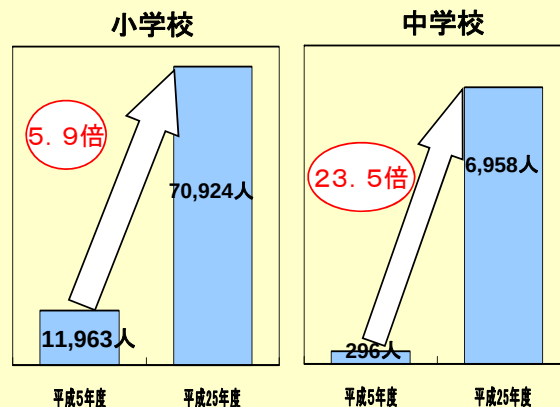
日本語指導が必要な外国人児童生徒数



(注) 公立学校のデータ

(出典) 文部科学省「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査」

通級による指導を受けている児童生徒数

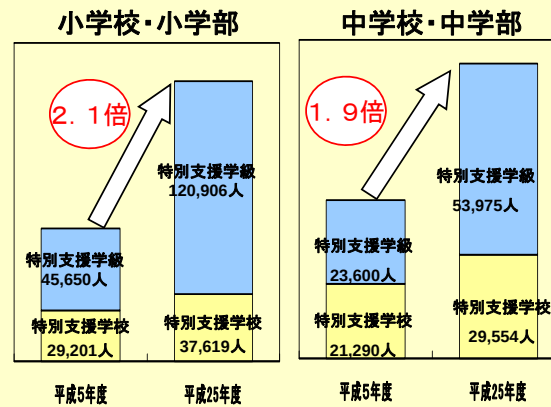


(注) 通常の学級に在籍しながら週に1～8単位時間程度、障害の状態等に応じた特別の指導を特別な場で行う教育形態。

・平成18年度から通級による指導の対象にLD及びADHDを加えた。
・小・中学校における通常の学級に在籍する発達障害(LD・ADHD・高機能自閉症等)の可能性のある児童生徒の割合は、6.5%程度と推計されている。(平成24年文部科学省調査。なお、学級担任を含む複数の教員により判断された回答に基づくものであり、医師の診断によるものではない。)

(出典) 文部科学省「通級による指導実施状況調査」

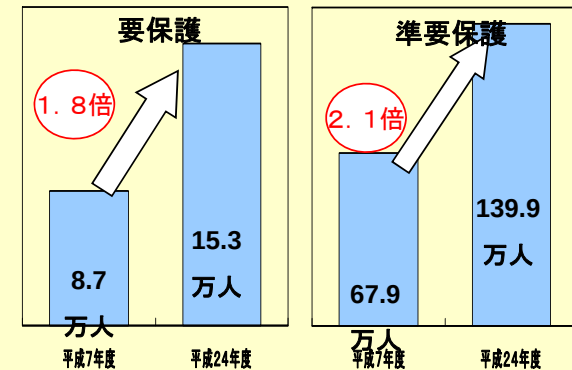
特別支援学級・特別支援学校(注)に在籍する児童生徒数(国・公・私立計)



(注) 平成5年度の特別支援学校は、盲・聾・養護学校に在籍する児童生徒数を合計した数字

(出典) 文部科学省「学校基本調査」

要保護及び準要保護(注)の児童生徒数



(注) 要保護とは、生活保護を必要とする状態にある者をいい、準要保護とは、生活保護を必要とする状態にある者に準ずる程度に困窮している者をいう。

(出典) 文部科学省調べ

育成すべき資質・能力の三つの柱

学びに向かう力
人間性等

どのように社会・世界と関わり、
よりよい人生を送るか

「確かな学力」「健やかな体」「豊かな心」を
総合的にとらえて構造化

何を理解しているか
何ができるか

知識・技能

理解していること・できる
ことをどう使うか

思考力・判断力・表現力等

幼稚園教育・保育所保育・幼保連携型認定こども園における教育と保育の整合性、
小学校教育との円滑な接続に向けて（イメージ）



幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿



＜参考＞小学校学習指導要領 第1章 総則 第2 教育課程の編成

小学校学習指導要領

第1章 総則

第2 教育課程の編成

4 学校段階等間の接続

教育課程の編成に当たっては、次の事項に配慮しながら、学校段階等間の接続を図るものとする。

- (1) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。

また、低学年における教育全体において、例えば生活科において育成する自立し生活を豊かにしていくための資質・能力が、他教科等の学習においても生かされるようにするなど、教科等間の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるよう工夫すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。

※下線部：主な改訂箇所

「子供の頃の体験が育む力とその成果に関する研究」の概要

研究目的

本研究は、我が国の青少年の自己肯定感が諸外国に比べ低いと指摘されていることを踏まえ、体験活動と自己肯定感、今の青少年に求められるへこたれない力、意欲、コミュニケーション力との関係を検討し、これを高める体験活動の在り方を提案することを目的とした。

研究方法

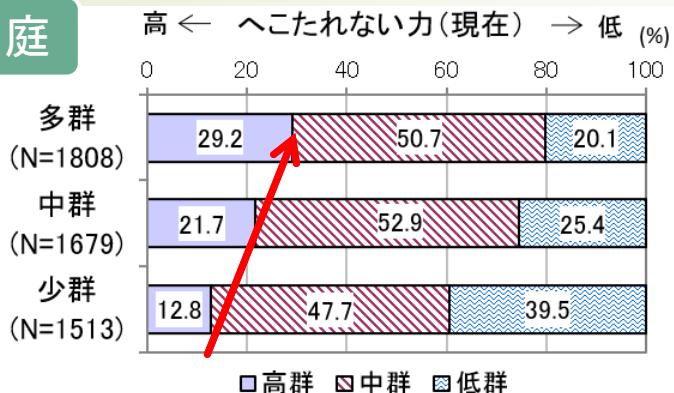
調査対象 全国の20代～60代の男女 5,000人
調査期間 平成28年10月4日（火）～10月6日
（木） 3日間
調査方法 ウェブアンケート調査

結果①

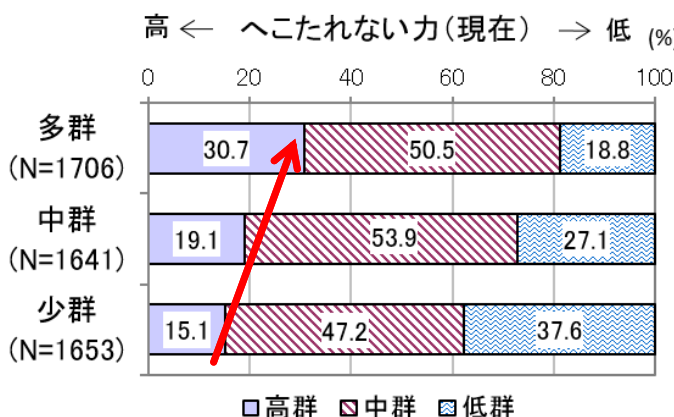
「家族行事」（家庭）、「友だちとの外遊び」（地域）、「委員会活動・部活動」（学校）を多くしていた人ほど、社会を生き抜く資質・能力が高い。

家庭

基本的
生活習慣
(子供の頃)

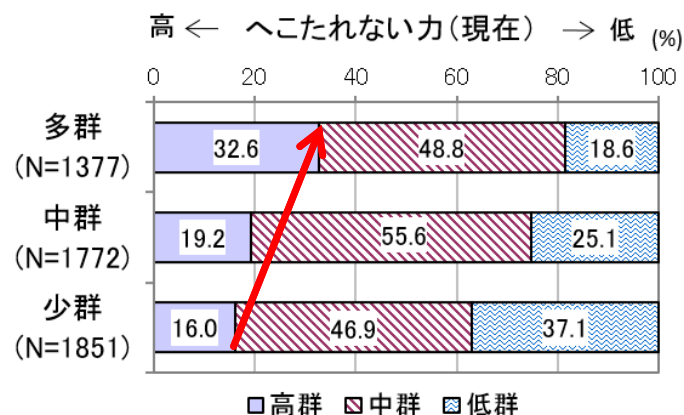


家族行事
(子供の頃)



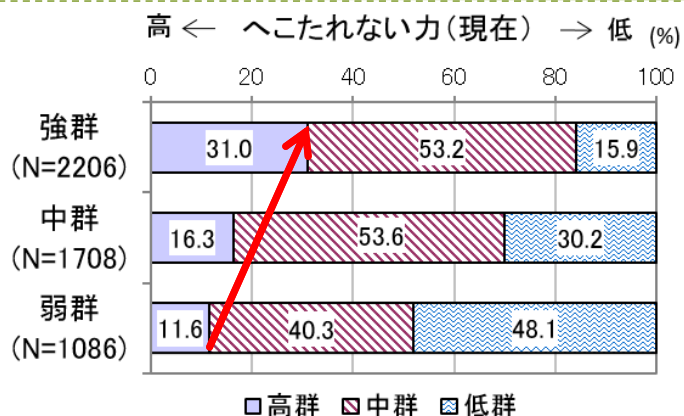
家庭での体験と社会を生き抜く資質・能力の相関分析の結果

お手伝い
(子供の頃)



質

家族との愛情・絆
(子供の頃)



就学前の「基本的生活習慣」「家族行事」、小学校低学年以降の「お手伝い」「家族行事」は、意欲、コミュニケーション力、自己肯定感と相関がみられた。(概要 p 11)

2 生活体験・自然体験・社会体験など、様々な体験を通して子供たちは心や体を育みます。

その体験が今、子供に不足していると言われています。

○そこで、あなたなら子供にどんな体験をさせたいですか？

次の様々な体験の中からベスト3を選び、下のあなたの欄に書き込みましょう。

○グループの人の意見も欄に書き込みましょう。

- ・ 鬼ごっこ
- ・ 遊具、アスレチック
- ・ 砂遊び
- ・ 竹細工作り
- ・ 基地づくり
- ・ 木登り
- ・ 川遊び
- ・ 磯遊び
- ・ 魚釣り
- ・ 山登り
- ・ キャンプ
- ・ 畑仕事
- ・ 米づくり
- ・ 通学合宿
- ・ 旅行
- ・ 家事
- ・ 伝統的な文化や行事
- ・ ボランティア
- ・ 異学年交流
- ・ 地域の人との交流

名前	1 位	2 位	3 位
あなた			

幼児期の体験の効果とは

- 事業評価の方法① 万歩計を活用した・・・
② 参与観察にて、子供や保護者の発言から・・・
③ **子どもたちの絵の変化による評価**



実施前



実施後

滑らかな水面
生き物や船などが描かれている
靴を履いている
描かれている人は2、3人
海を見ている、海に入っていない人

波がある海
人(わたし)も描かれている
裸足になっている
複数の人が描かれている
海の中、波の向こうにいる人



自然

自然は客体・対象
自分と自然は違う
自然は見るもの

自然に対する認識の変化
自然との関わり方の変化



自然の中にいる
自分も自然の一部

海と山は友だちプロジェクト

～学校教育と社会教育施設の連携～

独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立若狭湾青少年自然の家



小浜市立内外海小学校

内外海は、小浜湾に面する内海と若狭湾に開ける外海の両方に面しています。校歌に「久須夜と彦姫」「天平の塩」「日本に初めて渡ってきた象」「天下の奇勝蘇洞門」が歌われ、各集落から海の道が続き風光明媚な地区です。海の幸に恵まれ、古来から塩や魚介類など豊かな食材を奈良の都に提供していました。

校門を入ると、象の石像があります。近くに「象つなぎ岩」が現存し、日本に初めて象が渡って来た港町小浜の歴史にちなんでここに設置されています。かわいい象の名前は、「パオン」（波音）です。本校は、堅海小学校、阿納尻小学校、矢代小学校が統合され、平成3年に内外海小学校として開校しました。平成24年に田島小学校と統合し内外海地区、ひとつの学校になりました。

(内外海小学校HP 学校紹介より)

海洋教育パイオニアスクールプログラム 採択校【単元開発部門】

キーワード

「社会に開かれた教育課程」の実現

- ① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。
- ② これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり自らの人生を切り拓く（ひら）いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。
- ③ 教育課程の実施に当たって、**地域的人的・物的資源を活用したり、放課後や土日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。**

国立若狭湾青少年自然の家

理念「海の道 若狭湾」

我が国本土の中央部に位置し、津島暖流がもたらす豊かな山海の恵み、東アジアとつながる歴史・文化の玄関口「若狭湾」。海の道はここから全国・世界に続く。海の国の志気、青少年の生きる力を育み、この国の未来を担う志を持つ青少年の自立を図る。

そのために、豊かな自然環境、歴史・文化の資源を開発し、地域資源・観光資源とのネットワークを構築、地域の課題にも寄り添いながら、それらと連携してプログラム開発に取り組む、活気ある青少年教育施設を目指す。

海洋教育促進拠点

海洋教育つながり

特色あるふるさと学習（総合的な学習の時間）

<目標>

・内外海の歴史・文化・産業・人々について調べたり、自分の思いや考えを発信したりする活動を通して、ふるさとに対する愛着や誇りを持つ児童を育成する。

【歴史・文化・産業・人々】

・内外海の食についての調査や体験[地域を活用した体育的行事を含む]等の活動を通して、ふるさとへの食に親しみ健康を考えることのできる児童を育成する。

【食・健康・体力】

・内外海の自然環境についての調査や体験等の活動を通して、ふるさとへの愛着を高め、自然環境に対する望ましい価値観や資質を持つ児童を育成する。【自然環境】

(2017年度 内外海小学校「特色あるふるさと学習」全体計画より)

この目標を軸に、4年生では「海と山は友だちプロジェクト2017」に取り組んだ。

教科等に関連付けた体験活動プログラム

2020年度からの、次期小学校学習指導要領の全面实施に向け、集団宿泊活動で行う体験活動を教科等との関連を図り、各学校の年間指導計画に位置付けてもらえるよう、文部科学省及び都道府県教育委員会と連携して学校等への広報の方策を検討する。そのため、**各施設において取り組んでいる体験活動と教科等との関連を具体的に示していく必要がある。**

国立若狭湾青少年自然の家では、施設周辺の『海と山が近い』『海中の動植物が豊富』という環境を活かし、ハイキング・シーカヤック・スノーケリングを活用した**具体的な学習の展開および、学校教育との連携についての研究を進めることとした。**

校区でもある小浜市立内外海小学校に対して積極的に本施設周辺の環境を提供し、学習活動の支援に取り組んでいる。

2017年度の活動について

① ハイキング 「山の地形と沢の様子を観察しよう」 6月13日(火) AM

尾根と谷が連続する遊歩道を歩き、地形の特徴や海へと注ぐ沢の様子を観察。

	9:00	9:30	10:00	10:30	11:00	11:30	12:00
活動内容	お互いに自己紹介をする。 海と山は友だちプロジェクトについて、説明を聞く。	「沖の石歌碑」を目指してハイキングスタート	沖の石歌碑に到着	自然の家に向けて出発	沢が海に注いでいるところを観察	自然の家に到着	ふりかえり 感じたことを発表し、共有する。
『問いかけ』 「子どもたちの反応」	『これからたくさん自然の家で学びましょう。よろしく！』 「よろしくお願いします。」	『内外海小周辺の山道との違いを見つけよう。』 『沢があるね。水が流れているね。』 『沢には、クロヨシノボリという珍しい魚が生息しているよ。』	『ザトウムシという名前、千と千尋の神隠しの釜のモデルとなった虫だよ。』 『おもしろい形だ。』	『いい景色！遠くまでよく見える。』 『上るところと下るところがあって大変だ。』 『木に熊の爪あとがあるね。』 『学校周辺の山道と同じように、動物が住んでいる形跡がある。』	『確かに、海につながっている。』	『内外海小周辺よりも、道が広くて歩きやすかった。』 『沢があって、山から川へ流れて海に行くことが分かりました。』 『虫や植物が多かった。』	



② シーカヤック 「海中林を観察しよう」 7月11日(火) AM

カヤックの正しい漕ぎ方を身に付け、仲間と協力して海の上から海中林を観察。

	9:00	9:30	10:00	10:30	11:00	11:30	12:00
活動内容	活動の流れについて説明	ペアの確認。 漕ぎ方の説明。 大浜で練習。	海中観察の旅に出かける 大浜→赤石の浜→えびす浜(休憩)→島の越→大浜 ※箱めがねを使って、カヤックの上から海中を観察。 ※えびす浜にてカヤックから降りて、ペアで海中を観察。		用具の片付け	ふりかえり 感じたことを発表し、共有する。	
『問いかけ』 「子どもたちの反応」	『前回見た、沢が流れ込んでいるところを中心に、海の中を観察しよう。』	『ペアで協力してカヤックを漕ぎましょう。』 『一度経験しているので、息が合って漕ぎやすかった。』 『息が合わないとかクルクル回る。』	『海中林を見てみよう。』 『確かに、海の中に林がある。』 『山が小さく見える。』 『どうしたらこんなきれいな海になるのか?』 ※えびす浜にて 『海の水がぬるく感じた。貝が石にくっついていて。』			『ペアで協力して上手に漕ぐことができた。』 『海中林の中にはどれくらい魚がいるのだろうか?』	



4年生のみなさん

4年生11名(男子4名、女子7名)で活動に取り組んだ。田鳥・釣姫・阿納・泊・西小川など、海に面した集落に暮らす子どもたち。

家族が漁業をしていたり、カキやフグの養殖をしていたり、海に関わる仕事をしている様子を見ながら生活している子の割合が高い。

将来の内外海地区を支える、地域の宝である。



③ スノーケリング 「海中林に住む動植物を観察しよう」 9月15日（金）AM

正しい用具のつけ方・使い方を身に付け、海中林の中や潜堤周辺の動植物を観察。

	9:00	9:30	10:00	10:30	11:00	11:30	12:00
活動内容	活動の流れについて説明 館内掲示を活用し、本施設周辺に住む生き物の特徴をつかむ。	バディの確認。 用具の使い方の説明。 用具の装着。 大浜で水慣れ。	赤石の浜にて、岩の沢の水が流れ込むエリアを観察。 潜堤に住む生き物を観察。			用具の片付け	ふりかえり 感じたことを発表し、共有する。
『問いかけ』 「子どもたちの反応」	『前回見た海中林に近づいて、その中の様子を観察しましょう。』	『バディの様子を常に見ながら、安全に活動しましょう。』	『海中林の中を見てみよう。』 「水が冷たいところと、そうでないところがある。」「たくさんの魚がいる。ウニもたくさんいる。」「ペラがたくさんいる。ペラの好物でもあるのかな?」「ウニは引っ張っても取れなかった。」				「海中林に住む生き物を見ることができた。」 「他の海よりもたくさんの魚たちがいておどろいた。」



④ 塩づくり 「海水からおいしい塩を作ろう」 1月11日（木）PM

若狭に伝わる塩づくりの歴史を学び、奈良県の方に贈る塩を作る。

	13:30	14:00	14:30	15:00	15:30
活動内容	活動の流れについて説明 若狭地方に伝わる塩づくりについて学ぶ。 ・塩づくりの歴史 ・塩づくりの方法 など	海水を汲む →ろ過する →鍋でかき混ぜながら煮詰める ・なぜろ過が必要なのか。 ・何リットルの海水から何グラムの塩ができるのか。 など ※時間の都合上、事前に煮詰めて5倍に濃縮してある海水を使用した。		試食する。	ふりかえり 感じたことを発表し、共有する。
『問いかけ』 「子どもたちの反応」	『若狭ではなぜ塩づくりが行われていたのでしょうか?』	「結構時間がかかる。」 「お店で売られているような真っ白な塩にはならない。」		「おいしい」 「本当に塩ができた」	「ぜひ、奈良の方にも食べていただきたい。」



1月23日、6年生と共に、奈良市役所へ行き、小浜市のPR活動を行いました。そこでこの塩は奈良市の方々にプレゼントしました。

活動のまとめ

ハイキング・シーカヤック・スノーケリングのそれぞれの活動を通して、見たことや感じたこと、疑問に思ったことなどを模造紙にまとめて、学級内で共有した。

<ハイキング>

- ・登ってみて気づいたこと
- ・発見した物の写真
- ・志の道との違い
- ・自然の家の人に聞きたい事 など



<シーカヤック>

- ・こいだ感じ
- ・海の中の様子
- ・がんばったこと
- ・びっくりしたこと
- ・疑問 など



<スノーケリング>

- ・海で見た生き物
- ・海の様子
- ・岩場の様子
- ・泳いだ感じ
- ・他の海とのちがい
- ・疑問 など



教室には「ESDカレンダー」が掲示されており、学んだことがどのようにつながっているのか、いつでも確認できるようになっている。

※ESD (Education for Sustainable Development)

……持続可能な開発のための教育



どの活動のふりかえりを見ても、実体験に基づいた感想が多く、体験活動の重要性を改めて感じた。活動を終えた時の「疑問」を大切にし、次の学びへとつなぐことを大切にしている。

⑤ 活動発表会 「2017年度の活動で学んだことを、自然の家の職員さんに伝えよう」 3月8日(木) AM
ポスターセッション形式で、「ハイキング・シーカヤック・スノーケリング」の3つの活動を通して学んだことを、分かりやすく伝える。



約60分間、若狭湾青少年自然の家スタッフに対して、それぞれのブースで発表することができた。

1月23日(木)に、6年生と共に姉妹都市である奈良市を訪れ、奈良市役所にて「小浜市内外海地区の魅力」を市役所を訪れた方々にPRしたこともあり、職員の質問に対して堂々と答える姿が見られた。

今後に向けて

①内外海小学校の取り組みとして

来年度は5年生(高学年)となる。内外海の歴史・文化・産業・人々などについて、調べたり体験したりしたことをまとめて理解し、思いを表現することにとどまらず、**「発信する」「実行する」につなげていく**ことが大切である。これまでの学習を整理し、体験を通して学んだことが質の高い「発信・実行」へとつながることを期待したい。

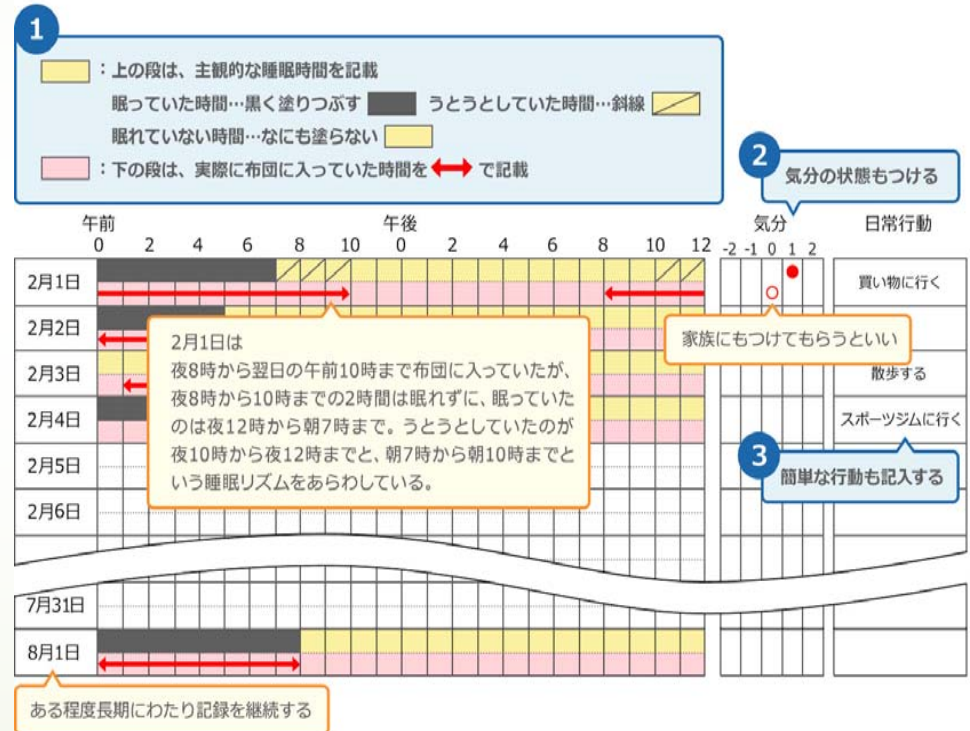
②若狭湾青少年自然の家の取り組みとして

本年度、教科等と関連付けた体験活動プログラムの具体的な事例を創り上げるという観点で、内外海小学校との活動を進めてきた。子どもたちの様子を見てみると、**「実体験を基にした学習が効果的だということ」**を再確認できた。「海洋教育つながり」としてこれからも連携を図り、将来の内外海を担う大切な存在である子どもたちが、伸び伸びと学び続ける姿を期待したい。青少年教育施設として学校教育をどのように支援するかは、「社会に開かれた教育課程の実現」という観点から、今後ますます期待されることとなる。内外海小学校との取り組みで積み上げたものを、他の学校でも実現できる形に変化させるなどし、**「より多くの学校と連携すること」**が今後の課題であると考えている。

体験を通して目指す「自立」と「自律」



睡眠と覚醒のリズム表の記入例



【参考資料】資料が必要な方は、下記の担当までご連絡ください。

- ➡ (1)  (2)  (3)  (4) 

- ➡ (1) 「しぜんであそぶ！」まるわかりガイドブック
～「場」と「きっかけ」から身に付く36の動き～
- ➡ (2) 集団宿泊活動サポートガイド
教科等の学習に関連付けることで高まる集団宿泊活動の教育効果
- ➡ (3) 平成29年度「教科等に関連付けた体験活動プログラム」事例集

【1～3の連絡先】教育事業部企画課

TEL : 03-6407-7712、7723

MAIL : honbu-kikaku@niye.go.jp

- ➡ (4) 8歳までの海遊教室（研修会申込み〆11/4）

【4の掲載URL】 <http://www.niye.go.jp/files/3891/184308690.pdf>